

# 人権なら

2021年9月1日

第129号

NPO なら人権情報センター

● ひと・まち・生き生き

## 「差別と人権」研究集会は中止に

### コロナ感染の大爆発でやむなく判断

9月4日に開催予定だった第12回奈良県「差別と人権」研究集会は、コロナ感染拡大が急激に勢いを増してきたため、急きよ、中止することとなった。昨年に続いて2年連続の中止を余儀なくされた。



事務局では、開催に向けて周到に準備。実行委員会でも、「コロナパンデミックと差別」をテーマにした集会内容の充実に向けて協議を重ねてきた。

記念講演を依頼していた藤原辰史さんや、パネラーの予定だった最首悟さん、高橋年男さん、加藤めぐみさんからは、それぞれ報告資料をいただいていた。

いずれも討議資料に収録。簡単に紹介する。

### 藤原辰史さんは「歴史から考える新型コロナ」を

藤原辰史・京都大学人文科学研究所准教授は「歴史から考える新型コロナウイルス」と題する資料を準備してくれた。内容の構成は①歴史研究の中の感染症②スパニッシュ・インフルエンザ(1918-1920)③日本のスペイン風邪④これから起こりうること:歴史研究のアプローチ⑤もうひとつの歴史学の補助線:大規模畜産について⑥まとめ、となっている。



藤原さんは複合災害を心配。とくに、農業を軽視してきたツケが襲う食糧危機のほか、新自由主義の限界を指摘。①歴史が過去を発見するのではなく、現在が過去を発見する②すでに社会的にあった問題点が

顕在化する、などの多くの提起を期待していた。

### 最首悟さんは「身についた人権」を提起

最首悟・和光大学名誉教授は「身についた人権」と題する資料を準備。構成は①理想、普遍的原理②責任③閉世界、開世界④存在と関係⑤日本語。

最首さんは2016年7月に起きた津久井やまゆり園事件の被告と面会や文通を重ねてきた。被告の背後にある障害者への差別の頑強さを痛感。人間は頼り、頼られる「二者」から成ると考える。生物学者でもある最首さんからは、コロナ感染症にどう向き合うかの提起も期待していた。



### 「私宅監置」やハンセン病回復者問題も

高橋年男・公益社団法人沖縄県精神保健福祉連合会理事は、「無名性」で構成される被害は、真相を覆い隠す/映画「夜明け前のうた～消された沖縄の障害者」/「名前よ、立って歩け」、などを準備した。

高橋さんは沖縄における精神障害者への「私宅監置」を調査研究。1900年制定の精神病者監護法の下、精神障害者は地域社会から排除。法は憲法理念に反するとして1950年に廃止されるも、米軍統治下の沖縄では、1972年本土復帰まで合法化。今も隔離、排除する社会についての提起を期待していた。

加藤めぐみ・社会福祉法人恩賜財団済生会支部大阪府済生会ハンセン病回復者支援センターコーディネーターは「ハンセン病回復者と家族がおかれている実態と課題」と題する資料を準備した。

加藤さんからは、ハンセン病患者に対する隔離政策、強制堕胎、強制不妊手術、回復者への根強い偏見と差別とどう向き合うのかの提起を期待していた。

## 精神疾患に正しい理解を

### 奥田和男さんが三宅町人権講座で講演

第2回三宅町地域人権学習講座が8月17日、Mii Moであった。奈良県精神障害者家族会連合会の奥田和男・事務局長が「精神疾患に正しい理解を」のテーマで話をした=写真。



奥田さんには、精神病を抱えている息子がいる。「最初、わが子が精神病になるということは考えられなかった」。奥田さんは息子が精神病だとわかるまでや、その後の経過、家族会の活動について語った。

家族会連合会は奈良交通のバス運賃割引の適用や、福祉医療・精神障害者医療費助成制度の実現を勝ち取ってきた。息子の医療費助成補助も可能になった。ある日、息子が病院の送迎バスの運転手にオシャレな服装だと褒められたと喜んで帰ってきた。そうした当たり前前に声を掛け合える関係が大切だ。これまで当事者と家族が安心して生活できる社会、精神障害を隠さなくても良い社会の実現に取り組んできた。

### 「病状を持ちながらも自分らしく生きられること」

様々な転変があった。深夜に鎌を持って大声で叫びながら家を飛び出す。朝になって死にきれなかったと素裸で帰宅する。鎌で手を切って自殺未遂をする。だが、自殺未遂で済んで本当に良かったと思った。息子の苦悩や悩みを一緒に考えられなかったことを後悔した。精神疾患について理解していれば、いくらでも気づけたのではないかと自身の体験を語った。

西和家族会の学習会で信貴山病院長の徳山明広さんの講演を聴いた。「統合失調症」についてわかりやすく説明された。「何をもちて良くなったといえるのか」について、「病状を持ちながらも、自分らしく生きられること」だと言い切る言葉に力強さを感じた。

病気を持った人の足を引っ張る社会ではなく、応援

できる社会かどうかということが大切だ。統合失調症の症状は脳が働きすぎてしまうことと、脳がうまく働かないことがあって、バランスが取れなくなることを指す。

働きすぎで起きる現象が幻聴で、働きがうまくないときの現象が被害妄想となる。興奮しやすいのは本人の心が反応している現象で、症状ではない。ここは誤解しやすいところだ、と述べた。

### 今も根強く残る精神病に対する遺伝神話

また、症状が何故よくなったり、悪くなったりするのかについては、勝手に変動するものだ。ストレスや対人関係、自然環境や社会環境の変化などで変動するのだ、という。

逆に言えば、変化のない生活が一番安定する。調子が悪くなれば、普段と変わったことはしない方が良い。



家族としてできることや、より細かいコツ、よかった時や、失敗して悪い時の分析は大切だ。歳をとるほど良くなったという例が多い。日頃の生活を記録し、知恵を重ねる努力が必要だ、という。

現在の家族会の活動としては、やまゆり園事件を考える奈良の会に加盟。集会や講演会に参加している。奈良の家族会は全国的に結成が遅く、来年結成30周年となる。大阪は昨年、50周年を迎えている。

奈良は全国に先駆けて医療費の助成を実現してきた。ことし8月1日、精神国家賠償訴訟応援奈良の会を結成。長期にわたり社会的入院を存続させてきた政府の責任を問う裁判の支援活動をしている。

70年代の教科書には精神分裂症は遺伝であると記述されていた。この誤りを指摘して削除はされたが、それだけで、正しい記述はずっとされてこなかった。

来年度から、高校の保健体育に組み込まれて記述されることになった。小・中学校の教育でも必要だと考える。また、教員研修の場で家族会の声を聴くことも検討してほしい。精神分裂症に対する遺伝神話は今もなお根強く残っている、と話した。

## ひまわりの家はオンライン参加

### 第26回ピープルファースト大会 in 兵庫

第26回ピープルファースト大会が7月18日、兵庫であった。

1年ぶりの開催となったが、コロナ禍



のため、大会はオンラインによる開催となった。

ひまわりの家では、メンバー、スタッフ50人が地元三宅町に新しく出来たまちづくり交流センター「MiiM o」に集まり、視聴参加した=写真。

集会では、強制不妊手術、津久井やまゆり園、千葉県袖ヶ浦福祉センターなどの問題が討議された。

強制不妊手術問題では、優生保護法違憲国賠訴訟の原告でもある神戸の鈴木由美さんが話をした。12歳ごろのときに手術をされ、その後、体調不良で33歳くらいまでは寝たきり状態だった。こんな手術をされたのはおかしい。障害があっても人間だ、と怒りを込めて語った(神戸地裁は8月3日、賠償を求める権利は消滅しているとして鈴木さんらの訴えを不当にも退けた)。



### 抗議行動で虐待死事件の施設を廃止に

千葉県袖ヶ浦福祉センター問題では、養育園に入所していた知的障害のある19歳の少年が2013年11月、急死した。少年は施設職員から暴行を受けていた。



ピープルファーストジャパンは養育園と千葉県庁に対して抗議行動。園は2023年3月末までの廃止と、

全入所者の民間施設への分散方針を明らかにした。

全国の仲間たちはこうした虐待事件がある度に抗議行動をしてきた。でも、虐待事件はなくなる。虐待した施設も続いたままだった。今回、初めて虐待施設がなくなると聞いて、仲間たちで闘ってきたことがやっと実った大きな出来事だった、と報告された。

来年の開催地は北海道。全国の仲間たちと北海道で会えることを願いながら、ピープルファーストの歌で大会を締めくくった。(ひまわり支援員・吉田裕子)

\*\*\*\*\*

## 「差別と人権問題で思うこと」

### 山下力顧問が県町村議会議長会研修会で話

奈良県町村議会議長会(新澤良文・会長)の議員人権研修会が8月5日、橿原市にある県市町村会館であった。山下力・当センター顧問が講師に招かれ、「差別と人権問題で思うこと」と題して講演した=写真。



山下さんは、水平社運動が始められて100年が経つ。自身の運動歴は53年。部落問題との出会いは小学校の卒業と私立中学への進学をめぐってのころ。父のムラを隠せ。ムラから出ていけという「教訓」だった。

山下さんは1954年の「硫酸事件」と、1923年の「水国争闘」を紹介したあと、現在の運動体について考えを述べた。部落と周辺地域との生活格差はほぼ解消されたが、どちらもコロナ・パンデミックで生活困窮者が激増。これに有効に関わり切れていない、と。

「部落解放」へ導くはずの理論も定まっていない。せめて、議論は続けたい。これまでの既成概念は払拭したい。差別や人権問題に軽重はない。部落問題も人権問題の一つ。人は誰でも差別したり、されたりする存在。差別は法や制度でなくなる。差別は克服の対象で、廃絶の対象ではない、と提起した。

さらに、人間観の転換、共同の営みを通じての生き合う関係づくり、反差別・人権擁護の活動者集団の創立など、これからの運動課題を語った。

## 「欠乏」から「潤沢」へ

### 「人新世の『資本論』」 斎藤幸平さんが講演

斎藤幸平さんの講演会が7月31日、橿原市にある県社会福祉総合センターであった。実行委員会（崎浜盛喜・代表）が主催した。260人が斎藤さんの資本主義の矛盾や限界についての話に聴き入った。



斎藤さんは昨年9月、「人新世の『資本論』」を出版。34万部のベストセラーに。2021年新書大賞を受賞。

斎藤さんの主張はこうだ。近年、世界的に異常気象が頻発。その根源は資本主義にある。資本主義は際限なく膨張し、人間社会の基盤となる自然や資源を食い尽くす。さらには、貧富の格差を生む。人間の尊厳をも踏みにじる。

### 「脱成長 Kommunismus」こそが解決の道

SDGsは持続可能な成長が可能だとするが、まやかした。技術革新による効率化で経済成長を追い求

#### 編集後記 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「多様性と調和」を掲げた東京五輪。白々しいにも程がある。実態は招致段階からトラブルと不祥事まみれ。最後まで絶えなかった。巨額マネーの乱費、贈賄、盗作、女性蔑視、障害者いじめ、歪んだ歴史認識…。次々とリレーしながら見せ付けた。メディアは過熱報道で競技を沸き立てた。結果、コロナ感染が大爆発。「観戦は自宅で。感染しても自宅で」と自助と自己責任を押し付け。治療も施さず、数万人を自宅留置で見殺し扱い。強行五輪は人命の軽視、反差別・人権意識の欠如を世界中に晒け出した。この教訓は国際社会に通用する歴史認識の習得と人権教育の推進だ。

めると、さらに環境に負荷を与える。どこまでも拡大を目指す資本主義を前提にしては、気候危機に歯止めはかからない。

解決への道になるのは、マルクスが検討していた「脱成長 Kommunismus」だ。つまり、量から質への転換、社会の繁栄や生活の質に重きを置く社会に転換すること。ヒントは「コモン」にある。水や土壌などの自然環境や、電力や交通網などの社会インフラを市民が共同管理し、循環型の定常型経済を目指すことだ、と。

### 欠乏の資本主義、潤沢な Kommunismus

この日の講演で斎藤さんは、私たちはコロナの前までは夢を見ていた。気候変動にも何とかなると思ってきた。ワクチンを打って、経済を回復させて、「元に戻ろうとするのは、破局への道に他ならない」。

「持続可能な技術が出てくれば、無限の経済成長を続けていけると考えるのは有害」だ。企業はSDGsに協力している、環境に配慮しているかの姿を見せて、モノを生産し、売る。私たちは必要でないものを買わない、つぐらなないようにしないと。



私たちの便利で豊かな生活は、途上国にコストを押し付けてきた。暮らしを破壊し、自然を奪ってきた。たとえば、電気自動車。そのリチウムは南米で採掘される。このとき、大量の水を使い、飲料水を汚染する。

私たちは「資本主義そのものに歯止めを掛けないと救われない」。脱資本主義型の経済システムをつくりていかないといけない。「私たちが声を上げていくことが大事ではないか」と語り、話を閉めた。

#### ニュースレター「人権なら」

発行：NPO法人なら人権情報センター

〒636-0223

奈良県磯城郡田原本町鍵301-1

TEL:0744-33-8585/FAX:0744-32-8833

E-mail: info@nponara.or.jp

http://www.nponara.or.jp/